英知通信

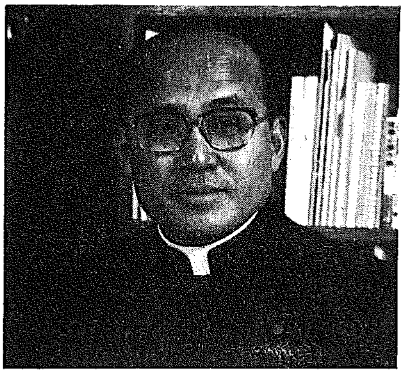
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2−18−1　(〒661)
TEL (06) 491 − 5083
編集
英知大学広報室

1984. 5. 31　UNIVERSITAS SAPIENTIAE　No. 40

入学式式辞

大学生活と目的意識

学長　傘木澄男



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。英知大学は皆さんを心から歓迎いたします。

大学は学問研究と、それを通して人間教育を行なう所です。そこでなされる教育はもはや受身のものではなく、あくまでも自分で自発的、積極的にする勉学です。確かに大学生には社会から相当の自由が認められます。大学生活はいわば一定期間の猶予を与えられて、社会の束縛を受けずに、自由に考え、学び、活動することを許される期間です。それは、実利実益を度外視して自分の目標を定め、これに向って最大限の努力をすることによって、その後の一生において社会に真に貢献できる人格と実力を身につけて欲しいという社会の期待からなのです。決して自己中心や未成熟の状態にいつまでも留まって、成長を拒否する態度を許すものではありません。皆さんはどうかこれから、こうした大学生としての自覚と自主性をもって自発的、積極的に努力して下さい。自主性ほど大学生活において大切なものはありません。「天は自ら助くる者を助く」という諺のとおり、自主性のある人でなければ、どんなに立派な施設・設備や教授陣に恵まれていても、進歩、成長は期待できないのであります。

本学は英知大学といいますが、英知とは〝完成された知恵〟を意味し、本学の掲げるカトリシズムの人間教育の理念サピエンチアの訳語として用いられています。それは一言で云えば、人間の尊厳性を一人ひとりの内に実現していくことであります。人間の尊厳、人格の尊さとは根元的には「人間としてのふさわしさ」「人間らしくあること」を意味します。そして、この「人間らしさ」とは頭の良さ、能力の有無のことではなく、何よりも広い心、温かい人柄、人を励まし生かす人、すなわち愛のある人、他者のために生きる人です。深い知識をもち、思慮ぶかく、つねに正義と愛に基づく生き方を求める成熟せる人。このような人、真に人間らしい人は、人間の源であり親である神を私たちに感じさせ、示す人です。これこそ〝英知の人〟です。

英知大学はカトリック大学でありますが、カトリックという言葉は普遍性を意味し、英知と同じ理念を表わす言葉です。私たち人間は他の動物のようにいわば自分たちの種や群の中に閉じ込もって身を守るのではなく、神の子らとして人類皆兄弟、個人や集団のエゴイズムを越えて、人間同士として互いに尊重し合い、愛し合わねばならないのです。英知大学は人間をこのような目で見、学生一人ひとりを大切にして、皆がこのような人間に成長していかれるようにと願っています。わが国は、明治維新により政治的鎖国からは脱しましたが、いわば精神的鎖国状態はその後も長く続いて来たのです。今日国際社会で大きな責任を担わされるようになってはじめて、わが国はこの閉鎖性からの完全な脱却を求められています。自分さえよければ、自分の家、自分の会社、自分の国さえよければ、他人や他国のことは知らない、といった態度を捨てない限り、日本と日本人の真の発展はないでしょう。国際化の時代において私たち日本人は、この閉鎖性の克服に、国民的な課題として取り組んでいかねばならないのです。皆さんも大学生活の間に、どうかこの問題意識を十分に持たれ、自分が人類全体の大きな連帯の内にあるのだということを考え、それに対する責任を自覚する人となって下さい。そこに英知大学の精神があり、また皆さんが本学に学ばれることの大切な意義もあるのだと私は考えるのであります。

皆さんの中には限りない可能性があります。人間は誰しも大きな可能性を秘めています。ところがこの可能性は様々な力に圧殺されて、必ずしも実現されません。日本人の心理と日本の文化を研究しているある学者によれば、「日本人は型への関心と同調を特徴としており、日本の社会は〝型の社会〟であり、日本文化は〝型の文化〟とも言うべき面をもつ」ということであります。すなわち人間関係が、例えば出身校別、出身地別、男女別、年令・世代別のような固定した型に沿って枠づけされ、各自自分の属する型をいつも意識し、それに同調していこうとする。自分がある型に属し、その型の性格はこうであると信じ込むと、一種の自己暗示が働いて自分の性格も特徴も個性もすべてその型に当てはめようとして、その結果本当に自分をそういう人間にしてしまい、自分の中にあった他のあらゆる可能性を殺してしまうというのです。日本社会のこうした定型化の力は今日教育の面では、偏差値による学力別の型分けとなり、様々の可能性をもち、たくましく成長しつつある若者たちを、進学や就職の進路別に容赦なく類別し、こうして類型化された子供や学生やサラリーマンを生み出します。このような徹底した管理社会のいわば一種の品質管理による規格品のような人間の大量生産、型にはめ込んでしまう人間の定型化は、あるいは日本社会の同一性を維持し、個々人の心理的安定と一国の社会的安定を確保する、必要に迫られた一つの知恵なのかも知れません。しかし一人の人間の内に秘められた限りない可能性を無視し、その実現の途を断ち切ってしまうというのは余りにも大きな損失といわなければなりません。私たちはこのことを心にとめて、「自分はせいぜいこの程度。いくら頑張ってみてもたかが知れている。できっこない。」このように自分を見限り諦める敗北主義的な態度は、きっぱりと捨てるべきです。そして自分の中に豊かに与えられている素質と能力、かけがえのない個性に気づき、それを最大限に伸ばしていくよう、大きな可能性に向かって努力していかなければなりません。

ところで、こうした可能性へ向っての努力の土台となるのは、何よりも目的を持つということです。目的意識、目的観がなければ、十ある能力、可能性の一つも引き出すことはできません。先日の新聞に、ベトナ

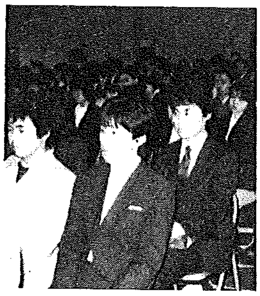
ム難民の少女が日本のある私立医科大学の入試に合格したという記事が出ていました。彼女は家族と共に祖国を脱出し、生死の境をさまよった太平洋上の小船の中で「いのちほど大切なものはない」と身にしみて感じ、「自分はどうしても医師になって、大切な人間のいのちに関わる人生を歩みたい」と心に念じ、上陸した時は一と言も出来なかった日本語を、「あいうえお」から始めて必死に勉強して、四年半。この春ほかの日本人受験生と同じ条件で受験して、見事難関を突破したのです。この少女は、人よりも特に優れた能力の持主でも、並外れた頑張り屋でもあったわけではないでしょう。その彼女にこれだけの力を与えたのは、荒海の中で生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされ、それを乗り切った体験から生まれた不動の目的観、すなわち自分は医者になって人のいのちを救うのだという明確な目的意識ではなかったでしょうか。この目的意識をもって彼女は将来きっと立派な医師になることでしょう。日本のような恵まれた国の青年たちには、この少女のような限界状況の体験はないでしょうが、これほどの体験がなくても、皆さんには自分の大学生活、自分の人生に目的を設定することはできるのです。現代の若者については学力の低下や知識の不足ということが盛んに言われるのでありますが、実は皆さんにはいろいろな点でかっての大学生たちよりも優れた能力と知識が備わっているのです。とくに語学や科学の知識は格段に増えています。しかし、こうした能力を十分に活かしきれないでいるというのが実情です。それは今の若者たちが人生における明確な目的を持っていないからです。目的がなければ、どんなに優れた能力も、どんなに恵まれた条件も、これを活かすことができません。昨今の大学生は、大学に合格して入学すると、やるべきことが分らなくなり、進むべき道を見失なってしまい、それを見つけようともせずに、ただ無気力に日を送る人が多いようです。目的観の喪失は今日の大学生をむしばむ最大の欠陥です。何の目的もなく、その日暮しをしていますと、四年間はあっという間に過ぎ去って、残るものは後悔と空しさだけということになりかねません。大学生活が本当に実りあるものとなるか否かは、ひとえに各自の自覚と努力にかかっているのでありますが、その原動力となる、はっきりとした目的意識ほど、大学において大切なものはありません。

では何を大学生活の目的にしたらよいか。それにはいろいろなものがありましょう。何か特定の仕事や職業を目指す。これは一番具体的な目標となります。あるいは教師の資格とか、留学のための外国語の勉強とか、勉学のかたわらスポーツや音楽など、何か課外活動をして、将来その方面で伸びていきたいとか、あるいはそうした活動を通して良き生涯の友をつくるとか、そのようなことに目標を置くこともできましょう。ところが多くの学生は、何をしたらよいか、何になったらよいのかと迷っている内に、一年、二年とたって、そのまま卒業してしまうということになりがちです。そこで私は皆さんに、大学生の目的観は、どういう職業に就くかということよりも、もっと根本的に、まずどういう人間になるかというところに設定すべきであることを申しあげたいのです。それにはまず、勉学に励んで、学力・実力を身につけること。これは誰にとっても、将来何をするにしても、第一の目標とすべきことです。入試制度の改善や学歴社会の改革が今日教育改革の眼目とされていますが、学力中心ということはますます強まるでありましょう。学力や実力が無用になる世の中は決して来ないからです。皆さんがこれから履習することになる様々な科目の勉強は、一般教育科目も体育の授業も、専門課程の科目も、何一つ無用・無駄なものはありません。これら科目の地味な勉強の積み重ねが、たとえその時はその意義が良く分らなくても、将来必ず自分の仕事や生活の大切な土台となるのだということを疑わずに、一つでも多くの言葉を覚え、一冊でも多くの本を読んで、できるだけ多くの知識を身につけ、知性を磨いておくことが大切です。そして第二には、人間成長、人間性の豊かさを目指すということです。大学卒業生が社会から求められ、期待されているのは、専門の知識や能力もさることながら、何よりも人間の幅が出来ているからであります。広い見方ができ、他者のことも考える広い心をもつ人間となることが大学生活の目的です。ここにも皆さんの目指すべき目標があります。

大学生活の目的、人生の目的は自然に与えられるものではなく、各自が自分自身で体験の中から、あるいは思索を通して、発見し、明確な判断と意志をもって自己の眼前に設定すべきものです。もし皆さんに今目的が見当らないとしたら、それは皆さんがまだそれをまじめに求めたことがなかったからでありましょう。しかし大学に入られた以上そのような呑気な態度は許されません。そこで私は皆さんに大学生の本来の務めである次の事柄を当面の目的としてスタートすることをお勧めしたいと思います。それはまず、まじめに勉強して知性を磨き、視野を広めるとともに、自分で考え・理解し・判断する力を養うことです。次に自分の意志と責任において行動する自主性を身につけ、自分さえよければという自己中心の態度から脱却して、他者を尊重し、思いやる真の優しさをもつ成熟した人間となること。そして最後に、心のより所となる精神的立場、しっかりとした価値観・人生観の確立を求めることです。これらのことを毎日の授業、課外活動、交友関係、そして日々の生活全般に亘って心掛け、実行していくことです。

皆さん、どうかチャレンジ精神を発揮し、いつも何かに挑戦して、「大学生活で私はこれをやった」と云える思い出を残して下さい。二度と帰らぬ青春です。悔いのない大学生活を送って下さい。これをもちまして私の歓迎のご挨拶といたします。

昭和五十九年度 入学式挙行さる



桜の開花も遅れ、キャンパスの桜の蕾もまだ固い四月四日、本学講堂で昭和五十九年度入学式が行われた。

式は開式の辞に始まり、聖歌斉唱、聖書朗読、入学者指名に続いて傘木学長が本学の理念と学生のあり方について別掲のような式辞を述べた。今年度の入学者は編入学者を含めて英語英文学科百六十七名、西語西文学科四十九名、仏語仏文学科四十七名、神学科九名の二百七十二名であった。新入生は男女共に紺やグレーの地味で落着いたスーツ姿が多く見られた。式のあとポプラ並木に待機していた各クラブの部員による新入部員の獲得合戦がくり広げられた。

＊　＊　＊

新入生 学外オリエンテイション実施

―近江八幡国民休暇村で一泊―

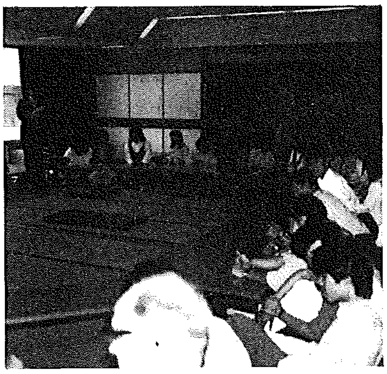
新入生の学内オリエンテイションは四月四日の入学式日から三日間行われたが、この間に新入生は教務課、学生課、図書館、宗教主事室、学生会等のガイダンスを受けたのち、履習登録を済ませ、教科書の購入も終えて翌週からの授業に備えた。

それから二週間余り経った四月二十六日・二十七日の二日間、琵琶湖の湖畔にある近江八幡国民休暇村で学外オリエンテイションが行われた。学外オリエンテイションは五年前に六甲山頂の凌雲荘で実施されて以来中止されていたが、今年度から再開されたもの。周到に準備されたプログラムにより、全教員の八割に当る先生方が参加して有意義な二日間を過した。

当日は五月晴れの中を新入生、上級生、教職員等約三百人がバス六台に分乗して、風光明媚な琵琶湖畔の宿舎へ向った。現地では新入生二百五十人を英語英文学科三クラス合同のグループと、神学科、西語西文学科、仏語仏文学科合同のグループの二つに分け、それぞれ本館と別館に投宿して、別掲の日程表のようにオリエンテイションが行なわれた。プログラムは学長講話から始まり、昼食後は学科別に集合して、新入生二

人ひとりの紹介があり、次いで学科長から学科の特徴の説明や四年間の勉学に関する指針が与えられ、新入生は勉学への志を新たにした。続いておそ咲きの桜満開の景色を窓外に見るカフェテラスで大学歌の合唱が行われ、カセットテープから流れる歌声に合わせて大合唱となったりした。また作曲者の帘（さかばやし）先生から朗朗たる声で応援歌が披露された時は満場手拍子で応え、大喝采であった。夕食後はアドバイザー制のグループごとの集まりがあり、「外国語の上達法」「学業と友情」「クラブ活動」「留学の可能性」などの豊富な話題のもとに話し合いが行われたが、中には「要領のよい単位のとり方」なども飛び出したりして新入生の緊張感はほぐされた。またスペイン人の先生から民族舞踊が披露された時は、座は大いに盛り上った。両日とも好天に恵まれたため、琵琶湖畔でゲームに興じたり、遠く沖ノ島を背景にカメラに収まったりするいくつかのグループも見られた。

クラス単位とアドバイザー制の親密な触れ合いを通して本学の建学の精神を学びながら大学生活への定着をはかり、新入生一人ひとりがそれぞれの可能性を十分に開花させていけるように援助することを目的として企画された今回の学外オリエンテイションは、教員大多数の参加を得て、大成功であったといえよう。今後プログラム等について反省、改善を要する点は多々あろうが、学外オリエンテイションの意義と重要性はこの今回の経験で十分に確認され、この企画の今後の発展とより大きな成果が期待される。



昭和59年度　学外オリエンテイション 日程表

日	時刻	神学科　西語西文学科　仏語仏文学科（本館）	英語英文学科（別館）
4月26日（木）	9:00	大学集合　クラス別集合・点呼・バス分乗	
	9:20	出発	
	11:20	休暇村到着	
	11:35	入村式	入村式
	11:40	学長の話	学生部長の話
		学生課（注意事項・部屋割）	学生課（注意事項・部屋割）
	12:30	昼食	昼食
	14:00	学科長の話　クラス担任・アドバイザー（学科別集合）	学科長の話　クラス担任・アドバイザー（学科別集合）
		休憩	
	15:10	共に歌おう大学歌	職業指導課の話
		国際交流委員会の話	共に歌おう大学歌
	16:25	休憩	
	16:40	職業指導課の話	国際交流委員会の話
	17:40	休憩	
	18:00	夕食	夕食
	19:20	アドバイザーグループのディスカッション	アドバイザーグループのディスカッション
	20:50	クラス毎の親睦	クラス毎の親睦
	9:10 9:30	夕べの祈り（神・西・仏全員）	夕べの祈り（英文全員）
		入浴（自由）	入浴（自由）
	10:00	就寝	就寝
	11:00	消灯	消灯
4月27日（金）		起床	
	7:00	ミサ（自由参加）	
	8:00	チャペルアワー	チャペルアワー
	8:30	朝食	朝食
	9:30	クラス別ディスカッション内容発表及び各担任先生講評	クラス別ディスカッション内容発表及び各担任先生講評
		休憩	
	11:00	学生部長の話	教務部長の話
	11:40	教務部長の話	学長の話
		昼食	昼食
	13:10	点呼　バス分乗	
	15:30	園田着　解散	

国際交流委ニュース

三回生での留学の勧め

国際交流委員会
委員長　松本信愛

外国の文化、言語を勉強している者にとって、できることならば、実際にその国へ行って、生の言葉を聞き、直接にその国の人々と会い、本を通じて習ったことを自分の目で確めたいと思うのは当然である。その機会を少しでも多くの学生に与えようとして大学が企画しているのが、春期休暇中に行なわれている海外研修旅行である。しかし、事情さえゆるせば、もっと長期間滞在して、向こうの学生と一緒に勉強する、いわゆる「留学」を希望する者が多いはずである。

アメリカには姉妹校（ローラス大学）があるので、そちらへの留学は何かと便利な点もあり、人数も年々増えるであろうと予想はされていたが、今年は飛躍的にのびて、十一人の学生がローラス大学での授業に挑戦する。内訳は、四回生男子五名、女子二名、三回生男子三名、女子一名である。

英知大学の科目に対応する科目であれば外国の大学で取得しても英知で認定されるので、うまく単位を取得できれば、留学しても留年しないで卒業できるのであるが、四回生の男子は全員留年を計算に入れて、本年度は英知を休学にして留学することに決めた。勿論、それは就職活動のためである。

しかし、二人の女子の四回生は、できれば英知で残している単位を全てローラス大学にて取得し、来年の三月に同級生と一緒に卒業することを希望している。勿論、卒業に必要な科目を一つでも取り損えば卒業はできない。

その点、三回生の時に留学すれば、留学中に取れなかった三回生の科目を、帰国後、四回生の時に英知で取ればいいし、さらに、四回生の時に就職活動もできるので好都合である。

以上のような理由で、国際交流委員会としては、留学しても留年しないことを望む学生には、三回生の時に行くことを勧めている。

期間に関しても、アメリカと日本の学年暦の違いという問題があるが、ローラス大学の場合、単位を取得できる期間としては、六月～七月の「サマー・セッション」と、八月末～十二月の「秋学期」を考え、その前後は、各自の事情に応じて滞在し、授業を聴講するように勧めている。

スペインやフランスの大学も、一学期（半年）のみで終了する科目が多いので、単位を取得するのは前期（十月～二月）だけとし、その前の滞在は、語学の特訓の期間と考えれば、日本の学年暦との違いにも拘らず、日本の学年暦に合わせた留学が可能なのである。

三回生で留学して実力をつけ、四回生での勉強や就職活動を自信を持って行なうことができれば、留学の意義は大きい。その為には二回生になれば留学の準備を始めなければならない。また語学は急にはのびないので一回生の時から頑張ってほしい。

デュブューク草枕
ローラス・ホスト・ファミリーの人情に触れて

井田規文
（英語英文学科講師）

デュブュークに着いたのは雪の降りしきる日曜（三月四日）の昼下りだった。流石にアメリカ大陸を思い知らされる寒さである。私は既に経験しているからこの寒さが懐しいなどと学生に言ってみるが、やはり、寒い。年の所為か知らん。

学生達はこれ迄二日間、さほど英語を使うという苦労もなく、むしろ、シカゴ見物を楽しんだ後の心の緩みを大至急引き締めなくてはならず、その緊張が三十人のどの顔にも見られるのは面白い。初めて紹介されて、ホスト・ファミリーの人達と向かいあう彼等の身体の顫えが伝わって来るようである。これから丸々二週間、彼等はどのように慣れない英語を駆使（苦使？）するのだろうか。ホーム・ステイは大夫丈やってゆけるのか知らん。それに今回はこれ迄とは違って、英米文学関係のみの四講座を別々に四人の教授から受けるという。言わば、ミニ留学コースである。果して吉と出るか凶と出るか――。

三月小雪日。案ずるより産むが易しとはこのことか。彼等は何とかやるものである。と言うより、たどたどしい英語ではあるが、話す彼等の顔に、否、身体全体に、話そうという気魄さえ感じられるのである。英知にいた時は、一片なりともその能力を見せてくれなかった学生に限って、この傾向が強いから驚きである。

三月寒風日。彼等の「能力の発揮」は、どうやら、彼等のホーム・ステイによるらしい。ホスト・ファミリーの人達に家族の一員のようにされるのが、何よりも彼等の異国での生活を楽しませているのだ。と、それに気付いたのは、学生の中に、「うちのお父さん」とか、「うちのママと買物に行った」などと言って、日本の父・母のことではなく、ホスト・ファミリーのお父さん、お母さんを、さも自分の両親の如くに呼んでいる学生がいて、話を聞いている私の頭を混乱させることが屢々あったからである。買物や、料理の手伝いをしたり、掃除をしたり、雪掻きをしたり、真に家族同然の生活を送っていたのである。

三月十九日。道理で別れが惜しい筈である。いつまでも家族の人たちの手を離そうとせず、「ディズニーランドなんかに行きたくない。もっとデュブュークに残りたい。」と泣き乍ら、最後には彼等の号泣とともにバスが出るという始末。想像はしていたが、これ程までとは。彼等は実に素晴しい経験をしたのだと思う。授業での英語の勉強もさることながら、人と人との触れ合いを、素朴な感情の昂奮を通して体験した彼等は、自分達が、恵まれた者であることをそれぞれが自覚したことであろう。

着いた日と同じように、降りしきる雪。デュブュークの冬は長い。が、いつまでも手を振って見送ってくれるホスト・ファミリーの人達、ローラス大学の人人に降り積る雪にも、心なしか春の気配を感じたのは何も私一人ではなかったと思う。

デュブュークの
　名残りを惜しむ手の中で
　　いつしか雪も溶けにけり

学園ニュース

栄えある叙勲

カタリナ・ライマン教授（教養課程）は昭和五十九年度の叙勲で勲四等旭日小綬章を授与された。産業、教育文化、福祉の面で生涯をかけて努力してきた人々が表彰される春の叙勲で、ライマン教授の長年の業績が認められたことは本学にとって大きな喜びである。

学生写真コンテストで優秀賞

平井義文君（西語西文学科三回生）は、大正海上火災主催による第三回「人間ていいな」学生フォトコンテストで優秀賞を獲得した。

「友」をテーマに、海辺で遊ぶ五人の子供達のいきいきとした姿を題材に撮ったもので、カメラ専門誌などでも作品が発表された。また五月の阪急電鉄主催の鉄道写真コンテストにも廃線以前の別府鉄道を走るディーゼル機関車の写真を出品してみごと一等賞を獲得した。

研究室だより

G・ベーキ教授（神学科）はユーゴスラビアのカトリック教会発行の〝我々の信仰〟（一九八四年版・特集号）誌に「日本の偉大なキリシタン人物について」と題する解説をハンガリー語で発表した。

翻訳・出版

前田総助教授（仏語仏文学科）はレーモン・ラディゲ著「ドルジェル伯爵の舞踏会」を翻訳出版した。（青山社。五八年十月発行。二〇〇頁）

沼野元義講師（教養課程・心理学）は訳書「生命ある限り」に続いて、同じくE・キューブラー・ロス著「生命尽くして」（生と死のワークショップ）を翻訳（共訳）出版した。（産業図書。五月七日発行。二、二〇〇円）

芝垣哲夫助教授（英語英文学科）は「文化の表層と深層」―異文化間コミュニケーション―を共著出版した。（創元社。四月二十日発行。一七〇頁。一、八〇〇円）

井上博嗣教授（英語英文学科）は五月一日、「幼児教育は家庭から」と題する小冊子を心のともしび運動Y・B・U本部から出版した。

人事

専任教員

退職（三月三十一日）
教授（英語英文学科）　山崎　正雄
助教授（英語英文学科）　ロバート・ウエスト

新任（四月一日）
教授（英語英文学科）　原　一郎
教授（教養課程）　稲葉　哲雄
教授（教養課程）　林　省吾
講師（教養課程）　ビセンテ・アリバス・モンテス

昇格
助教授（英語英文学科）　芝垣　哲夫

休職
助教授（教養課程）　吉村　延
講師（教養課程）　ハインリッヒ・シュヌーゼンベルグ

非常勤講師（新任）

英語英文学科　山内　邦臣
同右　粟野　修司
同右　アン・リチャーズ
同右　ドナルド・ボイル
同右　ビドル・ウォード
教養課程　橋本　一成

職員

退職
教務課　安藤　絢子
会計課　田口ミツエ
学生課　松原千代野

新任
会計課　樋口　英子
庶務課　須藤美知子

訃報

関知子講師（教養課程）
母堂逝去　昭和五十九年四月十六日
享年八十七才

入学試験結果
―昭和五十九年度―

昭和五十九年度の入学試験は、推薦入学が五十八年十一月二十八日・二十九日・三十日、一般入試は五十九年二月十四日に実施され、編入学者を含む二百七十二名が入学した。入試結果は別表の通り。

受験者数／合格者数　（　）内女子内数

	募集人員	志願者			受験者			合格者			入学者			倍率	
		推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	計
英語英文学科	90	198 (52)	404 (129)	602 (181)	191 (51)	330 (79)	521 (130)	80 (30)	129 (52)	209 (82)	78 (29)	83 (36)	161 (65)	2.4	2.6
イスパニア語イスパニア文学科	30	63 (14)	103 (28)	166 (42)	61 (13)	94 (23)	155 (36)	26 (12)	36 (17)	62 (29)	26 (12)	22 (8)	48 (20)	2.3	2.6
フランス語フランス文学科	30	49 (11)	115 (28)	164 (39)	49 (11)	100 (20)	149 (31)	24 (8)	38 (14)	62 (22)	24 (8)	23 (9)	47 (17)	2.0	2.6
神学科	10	2 (1)	9 (3)	11 (4)	2 (1)	8 (2)	10 (3)	2 (1)	6 (2)	8 (3)	2 (1)	6 (2)	8 (3)	1.0	1.3
合計	160	312 (78)	631 (188)	943 (266)	303 (76)	532 (124)	835 (200)	132 (51)	209 (85)	341 (136)	130 (50)	134 (55)	264 (105)	2.3	2.5

（編入学者は含まず）